イタリアワイン、EU域外への輸出減少率が9月までに2%強へ縮小

Unione Italiana Viniによると、夏場の販売回復でProseccoは持ち直したが、関税の不透明感と為替相場の逆風が続く。

2026年11月19日（木）



Unione Italiana Viniが水曜日、ミラノで開催中のSIMEI 2026で発表したデータによると、欧州連合（EU）域外市場へのイタリアワイン輸出は2026年第3四半期に回復の兆しを見せ、年上半期に続いていた落ち込みが和らいだ。

同業界団体によると、UIV Observatoryが分析した公式貿易統計では、EU域外向け輸出額の前年同期比減少率は、6月末時点の7.5%から、9月までの累計で2%強に縮小した。この数字は、イタリアの生産者が夏場に一定の巻き返しを見せたことを示す一方、同団体は、これを持続的な回復と判断するには時期尚早だとしている。

Unione Italiana Vini副会長で、欧州ワイン委員会CEEV会長を務めるMarzia Varvaglioneは、第3四半期には年初の厳しい状況を経て、イタリアと欧州のワイン市場に目に見える改善があったと述べた。スパークリングワイン、とりわけProseccoは2026年1～9月にプラスに転じ、金額ベースで4%を超える伸びを記録したという。

回復は、今年イタリアワインにとって最も厳しい市場の一つとなっている米国にも及んだ。UIVによると、米国市場向けのイタリアワイン出荷額は6月末時点で14%減だったが、1～9月の累計では減少率が5.5%に縮小した。

Varvaglioneは、関税をめぐる不透明感と不利な為替相場が市場環境を依然として厳しくしていると指摘した。夏場にはいくらか持ち直したものの、UIVの分析では、今後数カ月の動向によって回復が続くのか、一時的な改善にとどまるのかが明らかになるという。

この発言は、SIMEI 2026の会場となっているFiera Milano Rhoで開かれた、欧州ワイン産業の見通しをめぐる討論の中で出た。Unione Italiana Viniが主催する隔年開催の同イベントは、ワイン・飲料業界向けの技術をテーマとしている。主催者によると、今年は約500ブランドが出展し、海外24カ国とイタリア17州から出展者が参加したほか、海外バイヤー470人と60を超える予定イベントが集まった。また、Ipack　Imaと共同で開発した、液状食品・飲料に焦点を当てるプロジェクトBevertechも初登場した。

イタリアは輸出市場におけるスペインの主要な競合国の一つであり、EU域外でイタリアの販売が持続的に安定すれば、飲料業界全体における価格設定や販促、市場シェアにも影響し得る。その影響は、関税や為替変動が輸入ワイン、スパークリング製品、その他の高級飲料の需要をすぐに左右しかねない米国などの市場で、とりわけ大きい。

現時点で数字が示しているのは、回復は実際に見られるものの、まだ確かなものではないということだ。年央の水準からは大幅に改善し、特に米国市場とスパークリングワインで顕著だったが、9月までの輸出額はEU域外向け全体で依然として減少している。年末までの残りの期間、生産者は需要、通商政策、為替相場が回復の持続を左右する状況に直面する。